漱石についての雑感

尾形明子

ここ十年、金木犀が降る頃になると漱石の「こころ」を開く、と、いっても特別な意味があるわけではなく、四月からゼミで読み始める漱石が、毎年、この季節「こころ」に致るということなのだが、いつの間にか、私の中で「こころ」は金木犀と重なってしまった。

それにしても「こころ」に限らず、漱石の作品を私はいったい何回繰り返して読んだことだろう。何度も繰り返して読むことに堪え得る作品がそうあるはずもないのだが、漱石は私にとって読むたびに新しい。読むたびに胸がドキドキとする。

かるい興奮状態の中で今ではすっかりなじんだ作中人物が次々と浮び上がり、古くからの親しい友人のように、私に向かって語りかけたり、あるいは独白を始めたりする。

たとえば、闇のような舞台、淡いオレンジ色のスポットライトが中央にあたり、そこに正座した着物姿の奥さんがいる。

「あなたがお亡くなりになって、もう一年が過ぎました。いつもの秋と同じように、私は縁側に座わり、金木犀の香りに包まれています。うしろで、かすかに頁を繰りながらあなたは本を読んでいらっしゃる。そのあなたに、私は呟きつづけます。あなたは私が、何も知らないと本当に信じていらしたのでしょうか。真白いテーブルクロスの裏に、にじんだ染みに気付かれなかったのでしょうか。あなたはご自分の心の中は、十分によくおわかりになる方でした。でも、私の、というより女の人の心の中は、何ひとつおわかりにはならなかった。いっぱいの索引をつけて、私はあなたが、私の心を覗いて下さる時をただ待っていました。それなのにあなたは、ご自分の心の中に私を閉じ込め、私の心に封印をし、ひとりで去ってしまわれた。私の心をついに覗こうともなさらないで。いいえ、私の心をわかっていると信じ切って。あなたを愛し、あなたと暮した歳月は、小さな争いさえも幸福でした。私にとってあなたは私の世界のすべてでした。あなたの苦悩やあなたの余りの変貌に心痛めながらも、あなたの愛情にただ身をまかせておりました。その意味で私はきっともっとも幸わせな妻だったのでございましょう。

でも、今、それらの日々が、ひどく虚しく思われるのです。あなたにとって私は一体なんだったのでしょうか。女にとって愛することは、その人と生き切ることであり、その人と死ぬことなのに、あなたは私を切り捨ててしまわれた。あなたの世界の、私はただ美し

く愛しい色彩りでしかなかったことを思います。」

奥さんの声がふるえて、急にかすかな呟きとなり、呟きは果てしなく続く。舞台が次第に明るくなって、音もなく降りしきる金木犀で舞台が埋まる。

「私にも、男の方はよくわかりませんの」

やはり着物姿のほっそりと弱々しい「それから」の三千代が白百合を手にして言う。

「私、あの方に平岡との縁談を勧められてうなづくしかありませんでしたの。頼り切っていた兄が亡くなり、あの方は私にとって兄の代りでしたから。それに私、そのことが、あの方の私へのお返事なのだと思いました。私は結局、友人の妹でしかなかったのだと。あの方への思いに気付かないふりして私は平岡に嫁ぎました。あの方と結婚できないのなら、ほんとうは誰とでもよかったのです。私のそうした気持が、平岡を結局は傷付けてしまったのですね。それにしても、まさかあの時、あの方が、友情と愛情とを両手に持って、友情を選んでしまったなんて、女の私にはとうてい信じられないこと。それなのに今になって私に愛を告白なさる。私を渦巻の中に連れ込もうとなさる。いいえ、本音はとても嬉しかったのです。私の中であの方への思いはずっと続いておりましたから。平岡には申しわけないと心の底から思いますが、少しも後悔してはいません。でも、あの方は今も動揺しているようですわ。私は、死ぬ覚悟もできていますのに。」

「私にも言わせてほしいの」

柔らかで低い三千代の声に被さって、「彼岸過迄」の千代子の声が響く。

「あなたは卑怯よ。結局、ご自分のことしか考えようとしない。なにをそんなに怖れているの。私を、今、愛していて下さるのならご自分の出生がどうであろうと、将来が不安であろうと、私を真直ぐに求めればいいのよ。不幸になったり、躓いたりしたら、それはその時、一緒に歩きながら考えればいい。なぜ蛇が自分の尾を噛むようにとぐろを巻いて、ひとりで苦しんだり悩んだりするの。私をちゃんと見て。生身の女なのよ、私は。あなたの観念の中で私を片付けないで。まるで首をひっこめてしまった亀みたい。その叫び声も泣き声も、厚い甲羅に弾かれてしまう。」

「恐れる男」と「恐れることを知らない女」と、千代子の声は悲鳴になって須永に向う。

気が付くと舞台の裾には順番を待って女たちが何人もいる。漱石に殺されてしまった「虞美人草」の藤尾、「三四郎」の美禰子も、「門」のお米もいる。ひっそりとした頬を見せ少し離れて佇んでいるのは「行人」のお直だろうか。頬を紅潮させ黒目勝の瞳を見開いている「明暗」のお延の肩を抱いているのは、ひときわ存在感のある「道草」のお住。

漱石の文学が私を魅了し続けるのは、その作品世界が完結していないからなのだろう。時代も空間も、さらにはその才能や知力の差をもやすやすと越えて私たちは漱石の世界に入り漱石と話し続ける。人間とは、男とは、女とは。今を生きる私たちへのメッセージをしっかりと受け取る。その意味で鷗外のブラックホールのような恐しさはない。鷗外の女主人公と会話することなど私の発想に浮かばない。畏敬するしかない鷗外と敬愛してやまない漱石と。

そういえば、女主人公たちと一緒になって女の人がわかっていないと抗議する私の口調は、大好きな人に向かって、私のことちゃんと見てわかってよと、もどかしさと甘えをこめて訴える時のそれと、どうやら似ているようである。